才九行き

竹郎

起きて見ると思ひの外で空には一片の雲殿羽無い。唯吹き風が昨日の方向と変りがないのみである。滑川氏の宗内で出立した。正面から吹きつけ[illegible]で體が縮みあがるやうに寒い。突のめるやうにして行こうごむだ儘走った。炭坑會社の軽便鉄道を十町ばかり行て先あがりにのぼる。左は崖になって、崖の下からは竹が疎らに生へて居る。木肌の白い漆がすいすいと立ち交って居る。漆の皮にはぐるつとつけた刃物の跡が見える。山芋の枯れた蔓が途中から切れた儘絡まって居る。

小豆畑といふ小村へ来た。樓材たる柿の大木は青い苔が蒸して幾本となく立って居る。柿の木の下には小屋域の麦が僅に伸び出して、菜の花が短くさき揃けて居る。ところ〳〵に梅が真白である。

小豆畑を出抜けると道は溪流に沿ふて山の挾間にはいる。笹はぼつさりと水の上に覆ひかぶさって、山芋の蔓がびつしりと絆つて居る。頬白が淋しく啼きながら白い翅を表はして飛び出る。十三四位の女の子が[illegible]を背負つた馬がぼくたり〳〵とやつて来る。脚から

腰まで一杯に泥がついて見すぼらしい姿である。素性よくしげつた杉のほとりを行く。此あたりの道は規則正しく拵へたやうに、樓に一文字に低くなつてはあるが、又低くなつてどこまでも同じ

1

白い翅を表はして飛び出る。十三四位の女の子が[illegible]を背負つた馬がぼくたり〳〵とやつて来る。脚か

2

11

ら腹まで一杯に泥がついて見すぼらしい姿である。素性よくしげつた杉のほとりを行く。此あたりの道は規則正しく拵へたやうに、横に一文字に低くふつてはは高くふつてどこまでも同じやうである。低い所は蹄の跡で馬は必ずそこを踏む。泥水が溜つて居る。で飛び〳〵に高い所を踏むで行く。

杉の木の部分を過ぎると左に又山の挾間が見えて僅かばかりの田がある。流には土橋が架つて岐路がそれへ分れて居る。三辻の枯莖に職師が三四人休むで居る。炭をつけた馬が五六匹揃つて来た。田の間からも馬が二匹来た。五六匹の仲間は遠慮ふしにさつさと行き過ぎる。二匹の方は土橋の際で若い馬士がしつかと口もとを押へた。馬は口もとをとられふながら後足をあげて一跳ね跳ねた。脊中の材木が荷鞍と共に水の中へ落ちた。

曩きのやうに右手の樅について進む。足へぽくり〳〵と觸はるものがある。振り回つて見るとあとから犬が来る。犬の鼻の尖が觸はるのであつた。職師のうちの一人が蹤いて来た。狐色の筒袖の腰きりの布子で、同じ色の股引を穿いて居る。黎黑ふ肌に光りのある顏の五十格恰の嚴畳ふ親爺である。犬は遥かのさきへ行つた。

對岸の山の中程には炭窯の煙が枯木の梢をめぐつてこちらに靡いて居る。もう程ふく燒けはるといふ塩梅に

人が蹤いて来た。狐色の筒袖の腰きりの布子で、同じ色の股引を穿いて居る。黎黑な肌に光りのある顔の五十格恰の巖畳な親爺である。犬は遥かのさきへ行つ

た。

對岸の山の中程には炭竈の煙が枯木の梢をめぐつてこちらに靡いて居る。もう程なく焼けはるといふ塩梅に淺黄の煙である。

『此辺でしたか猟穴といふ所がありましたな。私等が絡を堀りに行つたらとがありました。二匹捕つて三匹目の奴が出て来たのを、手で捉へちや喰ひ付かれるといふので木挽の斧でぶむちぐつたら、すつと引つ込むちまつて失れつ切り出て来[illegible]。居るも居る三日三晩ばかり煙ぶしたがとうゝ出[illegible]。居ねえ筈は無いと思つたが辨當は無くなるし、まれ切りで歸りましたが、勝越の臘師等がその跡を堀つて五つ捕つた相でした。穴の口から少し下つて一匹死むで居たといふ話です。

滑川氏が臘師に話し掻けた。

『さう仰しやればあすこには幾ら居たか知れねえむです。いつかもそむちことが有つたむですが、貉といふ奴は妙な奴で、直ぐに死むた振りをします。人がひよつと見るとごろつと轉がつて、少し見届え振りをして居ると そろ〳〵起き出して見て、又ひよつと見るとごろつと轉がつてしめえますが、手拭で喉を括つて引つ搖いて来ても駄がねえむですからおかし

な奴ぢやあありませむかねどうも

行く〳〵話が途切れふいで。たまゝ路傍に甲の落ちた

臘師の言葉は愚ひの外に下品である。

をして居ると、そろ〳〵起き出して見て、又ひよつと見るとごろつと轉がつてしめえますが、手拭で喉を括つて引つ搖いて未てゝ駄がねえむですからおかしな奴ぢやあありませむかねどうも

行く〳〵話が途切れふい。たまゝ路傍に甲の落ちた炭竈がある。●は真赤に燒けかつて居る。焼けた土を●つて見た。小石交りの砂目である。かういふ良い土で一つ築いて見たいと思つた。

（脈師の二三葉は思ひの外に下手である。）

綻び拭けた梅がほの白く見えるのみで、人の氣も無、やうふ腰越といふ●ふ村へ出た。上り坂にふる。振り●ると小さふ山々を見越して眼界は漸く濶々として来たが霞が一面に棚引いて居るので明瞭に分らふい。見える筈だとふ海が空と一つである。あれが磯辺の松林であるといふのが、さう思へばさう見えるといふ位に過ぎふい。坂を登りつめて休むだ。足もとを見おろすと僅に麥畑が作られて、そのさきには段々の高低を成して田が形つてある。麥畑のめぐりには垣のやうに拵へた無雜作ふ駒除がある。放牧の馬が五六匹そここに餌をあさつて居る。上中に在つて鳴くかと思ふやうふ微かふ蛙の聲が聞える。

山と山との間から僅に露はれた頂には雪が真白である。二三日此方降つたものであらう。田の向ふには周囲が皆燒山で只一つ芝も燒けず常緑木の僅にしげつた小山がある。脈師はそこを指して語り出した。

『あすこで秋から兎を十六七ふ打つたむですが、まれでまだ七八つふ居るむです。周りがあの通りですから逐

皆燒山で只一つ莖も燒けず常緑木の僅にしげつた小山がある。腕師はそこを指して語り出した。

「あすこで秋から兎を十六七ゐ打[redacted]まれてまだ七八つゐ居るむです。周りがあの通りですから逐ひ廻つちやあ、あすこへ来ると見えるむです。兎といふ奴は馬鹿な奴で追ひ廻はされると、しめえにやあ元の所へ来つちまふむですから根氣よく追つ掛けりやあ屹度捉へられるやうなもむです。夫れでも又能のあつたもので、犬が追つて行つて今一息といふ所にちるとひらつと脇へ開く所がどうでしやう。それを二度もやられると犬は飽れて追[redacted]ねえむですがね。」

「さういふものですかね。此間は茶屋に兎が眠つて居たといふと、丁度法事の時ちゐものですから若い衆が

つたむですが

三四十人で取巻いてとう〳〵魚叉(ヤス)で突き殺してしまひました。全躰ことしは兎が居るやうですち。

腕師は物をいふ度に[redacted]揃つた長い真白な歯を剥き出す。坂を少し下る。十八九の娘が馬を曳いてのぼつて来た。米桃のやうな頬の赤い肉つきのいい娘である。裾がけの草鞋抜へで、荷鞍には二升樽位の大さの夫れよりは稍長い古ぼけた樽が両方に一つ宛つけてあつた。行き違ひに手綱をしごいて、左の手で馬の轡をとつてむつ[redacted]とした顔[redacted]で過ぎ去つた。

目の下には大北川の流が奔[redacted]つて居る。對岸に少しの平地があつて、水の流が蹄の形にめぐつて居る。古い小屋がところ〳〵に見える。炭[redacted]窯の跡[redacted]である。樹木は大抵伐採されて、櫟であらうか人の立つて居るやうな[redacted]

のやうなもの

その平地を

目の下には大北川の流が奔つて居る。對岸に少しの平地があつて、水の流が蹄の形にめぐつて居る。古い小

（ある平地を）

（のやうなもの）屋がところ〳〵に見える。炭窯の[redacted]趾[redacted]である。樹木は大抵伐採されて、櫟であらうか人の立つて居るやうな木の株がぽつり〳〵殘つて居る。凄凉たるさまである。

流のほとりまで狹くにしては迫る。鼻を突くやうな向この山は悉く落葉木であるからあたりがからつとして居る。萱の中かに馬が一匹じつとして立つて居る。

『あれは私が放して置くむですが、舊正月の二[redacted]日からうつちやつて[redacted]あるむです。子が止まつてから三月四月にありましやう。奇態なことにあの馬は生れたがら後足がミすばかり短いのでと[redacted]ても役に立たねえのです。』

（馬越）あたりの奴等はそこらの馬を捉へちや萱を背負はしたいとか、代を掻かしたとかいふむですがあの馬ばかりは手をつけませむ。自分でまた體が不自由なものですから決して遠くへ行かねえむです。

えゝなに、食ひ物さへありやどの馬でもそこに居るむですがね。

（の話）自ら

眼師は嘗て伯樂の[redacted]に移る。路の傍には二抱三抱の楠の樹が從聳えて、下には山吹が[redacted]つて青竹が交叉して居る。

小さな坂を幾つか越したり、駒除のそばを過ぎたりして再び大北川の流に達した。橋がある。こつちに石を積むで、向ふにも石を積むで、（水には影しい鐶眥が交つて流れる。）らべて水面に近く架け渡してある。大きな杉の板が二枚ふ橋を渡ると杉の五

小さふ坂を幾つか越したり、駒除のそばを過ぎたりして再び大北川の流に達した。橋がある。こっちに石を

積むで、向ふにも石を積むで、水には影しい錯雑が交つて流れる。らべて水面に近く架け渡してある。大きふ杉の板が二枚ふ多板をつけた馬が五六匹揃つて来た。橋を渡ると杉の五暫く馬を避けた。岸へ上ると山桑の老木がふらむで居て、老木の下の枯芝には火が二坪ばかり燃え屑がつて居る。馬士の供の板面である。[redacted]

段々行くとしユウッ〜といふ音が聞える。水車小屋の中から郷音くのである。[redacted]小屋へはいつて見た。機械で木材を挽くのである。外で大きふ水車が廻轉すると、小屋の中の歯車がめぐる。他の車がめぐる。車から車へかけた袋波のやうな象皮は中央の丸い錏をめぐる。人が錏を[illegible]むで居る。錏の傍には四角ふ柱が建てゝある。[redacted]錏へあてゝ、こつちから押す。さきで取る。[redacted]瞬く間に一枚挽ける又挽ける。榾はいつでも柱へ密接せしめてあるので板は常に柱と錏との間だけの厚さに出来る。榾一つ挽くのが煙草二三服の暇である。

水車の脇から又のぼる。坂の上から見ると小屋の外には挽きあげた板が人字形に組みふらべたのが一面に白く見える。ずむ〜登る。南京米の袋で縫つた衣物に荒縄をぐる〜巻きにした老爺が榾を背負つて来た。小村が目の前に表はれた。才丸である。

遥かあふたには焦げたやうふ一脈の禿山がつづいて居る。山のこふさは左右の山と山との間がひろ〜としたが見さ[illegible]

に荒縄をぐるぐ巻きにした老爺が樽を背負つて来た。
小村が目の前に表はれた。才丸である。

遥かあふたには焦げたやうふ一脈の禿山がつゞいて居る。山のこふさは左右の山と山との間がひろ〳〵として居て、狭い間ばかり見た目には殊に心持がよく感ぜられる。一縷の烟も立たふい三四十の萱葺の丈夫相に見える家が一つ所に聚つて居る。産土の森のやうふものも見える。周囲の平らみは皆田である。田には高低が無いやうである。馬が十匹ばかり放してある。どの馬も[redacted]も下を向いて頻りにふにかあさつて居るやうである。熟れを見て閑寂ふ沈むだ[redacted]である。[redacted]禿山の頂近くには一筋の土手のやうふものが仄かに見える。「山は盤城の國境で山の陰には杉の

木が一杯に植ゑつけてある。幅一間の堀を穿つて土手を築いて才丸あたりの馬が入り込まふい用心をして居る。茲から見えるのが其土手である」と脈師がいつた。

「此辺は丸であの山へ出たもむです。行きますともあれからぢやあずつと先まで行つたむです。それであオ丸ぢやあ大きに困るやうふわけふむです。一間位の堀[redacted]ふむぞぢやあ馬が飛び越えて行くむです。まれを山番がふつかめえて来ちやあ談じつけられて、才丸の奴等時々飲まれるむです。

脈師はかう笑びふがら言ひ續けたが坂の中途でどつかりと茶[redacted]腰をおろした。脚[redacted]を締め直すのである。脚絆

絆は丁度竹を細く裂いて編むだものへ漆でも塗つたのである。紙撚りて拵へて、猪の血を塗つて固めたものだといふ[redacted]ふやうふ塩梅の[redacted]のであつた。草鞋[redacted]猪の

脳師はかう笑ひながら言ひ續けたが坂の中途でどつかりと芝に腰をおろした。脚[illegible]を締め直すのである。脚

絆は丁度竹を細く裂いて編むだといふやうな塩梅のものへ漆でも塗つたのである。紙撚りて梅へて、猪の血を塗つて固めたものだといふのであつた。草鞋の代りに[illegible]猪の毛皮で作つた沓を穿いて居た。脳師は才丸の入口の桑の木が立ちふさがつてゐただけ小さな流のほとりで別れた。[illegible]

[illegible]合せた人のである。[illegible]田の中に草をむ突然けたゝましい聲がした。[illegible]しつて居た馬が尻を突き合せて跳ねたのであつた。

馬醉木第二卷之三所載
原稿

わが著書
續明治文學史下卷
所收

才丸行き

長塚節原稿

特別
文庫14
A50